

## 原著論文

# 国際高専の国際化への歩み Steps Towards Globalization at International College of Technology, Kanazawa

向井 守

*MUKAI Mamoru*

現在日本の教育機関において国際化の動きは極めて重要な位置をしめている。その内容は短期・長期留学の提供、海外の教育機関との協力協定に基づく交流活動、共同研究、英語のスピーチコンテスト、海外への修学旅行、海外インターンシップなど多岐にわたっている。国際高等専門学校も 1982 年のシンガポール修学旅行を皮切りに様々な国際化を試み、国際化に強い高専として 40 数年を歩んできた。2020 年には、校名を金沢工業高等専門学校から国際高等専門学校に変更した。本報告では、本校の 40 数年に亘る国際化の歩みを紹介していく。それに付け加え、今後の新たな国際化のための活動をも記すことにする。

キーワード：国際化、留学、国際交流、英語力、国際活動、海外修学旅行

The concept of globalization or internationalization occupies an important position at the educational institutions of Japan. There are multiple forms of globalization such as long- or short-term study abroad, interactions with overseas educational institutions based on cooperative agreements, joint research programs, English speech contests, overseas school trips, overseas internships, and so on. We, International College of Technology, Kanazawa (ICT) have implemented many global activities beginning with the school trip to Singapore in 1982, for more than 40 years. During this time, ICT has been known as a technical college with a strong emphasis in globalization. We have even changed the name of the school from Kanazawa Technical College to International College of Technology, Kanazawa. In this report, I would like to introduce the steps of globalization at ICT. In addition, I will describe our new activities for globalization for the near future.

Keywords: Globalization, Study Abroad, International Exchanges, English Language Skills, International Activities, Oversea School Trips

## 1. はじめに

日本学生支援機構の調査によると、2022 年の海外に留学する日本人学生は 58,162 人で前年より増加しているという<sup>1)</sup>。しかし、コロナ禍前の半数程度にとどまっている状況である。留学先はアメリカ、カナダ、オーストラリアという英語圏に留学生が多い状況である。留学生の留学理由は英語力の強化、各国々の教育機関への進学、また海外での就職準備など様々である。ほとんどは海外に身を置き生活、

学習し将来、留学で身につけた力を発揮して日本であるいは国外で活躍するという希望を持ってのことである。

国際高専（2018年までは金沢高専）ではいち早く学生、卒業生の希望を少しでも叶え、彼等の活躍舞台を世界に広げることを試みたのである。この試みが始まったのは今から43年前のことである。その時から現在に至るまで本校では様々な国際化への取り組みが行われた。

## 2. シンガポールポリテクニクとの交流

本校では1982年12月に第1回のシンガポール修学旅行を実施し2018年11月の第37回まで一度も欠けることなく4年生を現地へと送り出した。第1回目の実施は海外への修学旅行が珍しい時でニュース記者が同行したものである。今想えば本校の国際化の歩みの第一歩はこのシンガポール修学旅行であるのは間違いない。

第1回目の修学旅行の翌年、当時の副校長がシンガポール大使館に金沢高専と交流ができる学校がないかと問い合わせたところ、シンガポールポリテクニクを紹介してくれた。その翌年の冬に同校の校長が本校を訪問し両行の交流が本格化したのである。その後、シンガポールポリテクニクの学生と教員が本校でホームステイをして日本文化、教育を学ぶ「マイルプログラム」が始まった。このプログラムは現在も続いており昨年12月で32回目を迎えた。その間、約400件近い学生宅にホームステイをお願いした。毎年学生宅に電話して10日間のホームステイをお願いするのは私の役目で、大変であったが懐かしい思い出である。

シンガポールポリテクニクとは今も交流が続いているが、今日まで修学旅行、マイルプログラムの他にもラーニングエクспレス、CDIO イニシアティブ<sup>2)</sup>への参加、ポジティブサイコロジー、デザイン思考、SQA (Singapore Quality Award) システムの学びなど、共に学び、プログラムを考案しそして指導をも受けてきた。本校にとって同校は協力協定校以上の関係であり、その交流は本校の国際化に大きく貢献してきた。

## 3. 海外英語研修

1994年よりアメリカバーモント州のセントマイケルズ大学での海外英語研修が始まった。アメリカ国内のESL (English as a Second Language) プログラムを10校以上訪問調査して本校の学生に適したプログラムをデザインしてくれたセントマイケルズ大学を研修先を選んだ。1994年からコロナ禍に襲われる前年2018年まで毎年プログラムは実施された。期間は4～5週間で1日5時間の英語の4技能強化の授業と、放課後や週末は本校学生3人に1人のスチューデントアシスタントが活動や旅行に参加した。このプログラムはコロナ禍以降中止となったが2024年よりボストン、シアトル、ケンブリッジなどに研修の場を変えて実施している。海外英語研修の開始とともに本校の英語教育はTESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) を専門とする外国人教員と日本人教員との共同授業へと進化していった。文法訳読法やオーディオリンガルメソッドから使うための英語指導コミュニケーションアプローチにシフトを変えたのである。この英語教育と海外英語研修が学生たちの目を海外に向けさせるのに大きく役立ったのである。約一カ月の海外研修が後の一年の長期留学を生み出したのである。

## 4. ニュージーランドへの一年間留学

2004年にはニュージーランド、ダニーデンにあるオタゴポリテクニクに1年間の長期留学生として本校学生3年生が出発した。これは単なる言語や文化を学ぶ留学ではなく英語学習および学生それぞれの専門科目を英語で学び単位を取得する留学である。ダニーデンの一般家庭に1年間のホームステイをしてオタゴポリテクニクの正規学生として日々を過ごし、帰国後は単位の互換をして4年生へと進級する

という留学である。シンガポール修学旅行、アメリカへの海外英語研修を体験できた学生達は本校学生として長期の海外留学へと飛び立っていったのである。

この1年間留学のために、本校は職員を1名オタゴポリテクニクに派遣してダニーデンやオタゴポリテクニクの生活、学習、そして治安などを調査して送り出す準備をしたものである。この後はオタゴポリテクニクとは学生留学の場としてだけでなく教職員相互派遣、教員採用などの協力を行ってきた。この1年留学はコロナ禍の2年間はオンライン授業実施のみという経験もしたが現在も続いている。

## 5. 外国人教員採用の強化

ニュージーランドへの1年間留学を開始した2004年から外国人教員の増員を行った。オタゴポリテクニクで専門教科を学習する学生達が少しでも英語での授業に慣れるために外国人教員の英語による専門授業の実施に至った。当時は電気工学科、機械工学科、国際コミュニケーション情報工学科の各学科に1〜2名の外国人教員を採用した。授業は本校学生の留学先であるオタゴポリテクニクや金沢工業大学やローズハルマン工科大学の教員や卒業生達であった。この専門科目の外国人教員の採用が現在の国際高専の英語によるSTEAM (Science, Technology, Engineering, Art, and Math)<sup>3)</sup> 授業の先駆となったのは言うまでもない。

工学を学び、卒業し企業から海外へと派遣される機会が多い高専卒業生が海外の人々との協働するために英語による専門科目は不可欠と考えたのである。海外で仕事をする際に最も使われる言語である英語で工学を学び将来に備えることにしたのである。現在、国際高専ではこの初期の経験を基に学生たちが学ぶ専門科目、理数系科目、体育などの科目を外国人教員が英語で指導する新たな教育が展開されることになったのである。

## 6. 国際性習得の学生生活

現在、国際高専の白山麓キャンパスでは1、2年生が寮生活を送りながら学びの時を過ごしている。当然キャンパス内では英語が授業や生活の中で使われている。もちろん日本語も使われているのでバイリンガル環境の中で学生たちは国際性を日常生活の中で経験、習得しているのである。

日中の学生生活だけでなく夜間の学習時間にも外国人メンター達によるラーニングセッションが行われている。これは夜間の2時間自学自習時間に外国人メンター達から宿題を見てもらったり、オーラルプレゼンテーションを指導してもらったり、時には課題である英語で書くペーパーの添削指導を受けたりするものである。ここでも学生達は夜間の学習を様々なスタイルでありながらも英語で学んでいる。単調になりがちな寮生活において外国人メンターやクラスメイトとの自由で和やかな雰囲気他には見られない学習の機会となっている。このラーニングセッションも学生達の国際性意識を高めることに役立っているのである。

## 7. ラーニングエクスプレスの実施

2013年に本校がかつて経験したことのない国際プログラムに参加することになった。シンガポールポリテクニクが開発したラーニングエクスプレスである。当時、本校が力を注ぎだしたデザイン思考の活動と国際協力をミックスしたプログラムであった。学生達が東南アジアの国々の地方にある小村に約2週間滞在し、その村の小さな産業、生活、環境などを観察し村人にインタビューを行ってそれらに対しての問題発見をして村人の意見を聞き問題解決を行うという活動であった。その村に住み、住民達と交流し、現地の学生やシンガポールポリテクニクの学生とチームを組んで活動した。村の生活を経験し英語を用いて問題発見し解決に導くというプログラムは我々が最も望んでいたプログラムであった。シンガポールポリテクニクの強い勧めで参加したこのプログラムもコロナ禍で中断したが、再開の案内

と本校の準備態勢が整い次第再開したいプログラムである。

## 8. 今後の展望と抱負

本校は1982年から様々な国際化の挑戦を行ってきたが、未来に向けてさらなる飛躍を希望している。現在、学生の英語力や国際活動に対する意欲はかつてないほどに高まっている。この学生達の意欲に応えるべき国際高専の責任は大きい。学生達が本校で習得したスキルズを活かすべき活動をさらに強化し増やしていくことが強く要求されている。すでに試みが始まりつつありプログラムもある。学生が海外で行うインターンシッププログラムと学生が起業アイデアをもってイノベーションを創出するスタートアップ活動の充実化である。この2つがいま確実に本校のレギュラープログラムとして実施される準備が整って学生参加のもと動き始めている。

また北米、アジア諸国、そしてオセアニア地域に交流や研修活動の場を拓けてきた本校はまだヨーロッパ地域での活動機会がなかったことから現在、学生が参加できる活動の地域をヨーロッパに求め準備が整え始められている。

国際化の歩みにおいて最も大切なことは、いかに学生が実践的にその国際活動に参加できるかである。学生が彼らの知識、英語力そして意欲を用いて活動するプログラムをいかに多く提供できるかが大切である。学生達にいかにチャンスを与えるかということを常に意識していかなければならない。1982年からの歩みは40数年が経った。この先40数年の未来に国際高専は歩みを止めることなく、学生達の既存のプログラムを改善しそして彼らが参加し、挑戦したくなる国際化プログラムをデザインし提供し続けて行くことを確信している。

## 参考文献

- 1) 文部科学省：外国人留学生在籍状況調査及び日本人の海外留学者数(令和6年5月24日)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1412692\\_00003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692_00003.htm) (2025/1/31 閲覧)
- 2) CDIO Initiative: <https://cdio.org/about> (2025/2/27 閲覧)
- 3) “What is STEAM? ”: <https://informal.jpl.nasa.gov/museum/content/what-steam> (2025/2/27 閲覧)

[受付日 令和7年(2025年)1月31日, 採択日 令和7年(2025年)3月13日]



向井 守  
教授(副校長)  
国際高等専門学校

著作権は著者に帰属(2025)。この作品はCCBY-NC-ND 4.0ライセンスで提供されています。このライセンスのコピーをご覧になるには、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> にアクセスしてください。

Copyright 2025 The Author(s). This work is licensed under CC BY-NC-ND 4.0. To view a copy of this license, visit <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>